

On the Methodology of Monopoly Capitalism Analysis (3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24008

独占資本主義分析と 宇野「帝国主義段階論」(下)

水谷良夫

I 独占資本主義への移行と〈経済学の方法〉(本誌, 第2巻第2号)

II 独占資本主義と「金融資本」

1. 「生産の集積」と「固定資本の巨大化」
2. 独占資本と「金融資本」(以上, 第4巻第1号)
3. いわゆる「金融資本の蓄積様式」について

III 小括 (以上, 本号)

3. いわゆる「金融資本の蓄積様式」について

「金融資本」は、「資本主義の一定の発展段階に出現する資本の型として、商人資本、産業資本に対比せられる歴史的に特殊な蓄積の様式をもって発展するものとして規定されなければならない。」⁽¹⁾

「問題は生産過程を支配する資本が、自らは生産することのできない労働力を商品として確保する方式のいかんにかかっている。……自由主義時代を代表する産業資本は、自力で労働力を商品として確保する特殊の機構を有しているのであるが、その機構がまた恐慌現象という資本主義にとってはいわば致命的欠陥をとまなうものであって、決して永久的なものとはいえなかった。資本主義の一定の発展段階では、この点に重大な変化をもたらす新しい帝国主義を代表する金融資本にその地位を譲らざるをえないものを持っているといってよいのであった。」⁽²⁾

既に明らかなように、資本主義の「帝国主義時代」(独占=帝国主義段階)は、宇野弘蔵氏によれば、「金融資本」の「基礎」上で展開される「特殊な蓄積の様式」——いわゆる「金融資本の蓄積様式」——によって主導される段階的変容をその特質とするとされている。本稿の課題は、この「帝国主義を代表する金融資本」の「一般的規定」に関する検討・批判(前稿)を承け

て、それが主導する動態として想定・概念化されているいわゆる「金融資本の蓄積様式」について、同様にわれわれの分析視角から検討し、その上で、宇野氏独自の〈経済学の方法〉に基づく「帝国主義段階論」の方法的特徴とそれを支える基本的認識を対象としたこれまでの一連の批判的考察に当面の総括を与えることである。

なお序ながら、ここでの主題の位置づけと展開にとって、最小限度必要と思われる次の諸点を、以下、確認しておきたい。⁽³⁾

先ず第一に、「金融資本の蓄積様式」なる問題の位置づけについて。宇野氏の「帝国主義段階」の「基本的規定」は、既に述べたように、『経済政策論』の第三編「帝国主義」において与えられているが、この「金融資本の蓄積様式」という問題は、その第一章「爛熟期の資本主義」——第一節「資本集積の増大と固定資本の巨大化」、第二節「株式会社の機能」、第三節「金融資本の蓄積様式」——において、その総括部分に当たる最終節に文字通り独立した節のタイトルを付して取り扱われている。この編別構成上の位置づけから見れば、「金融資本の蓄積様式」というこの問題は、「金融資本」を基軸とする宇野氏の「帝国主義段階」の基本的認識のための方法概念として、いわば結節点に相当する重要な位置と意義が付与されているといえよう。すなわち、この第一章は、宇野「段階規定」の主眼である「金融資本」の「タイプ」＝「類型」的解明を行なう第二章「金融資本の諸相」および第三章「帝国主義の経済政策」の叙述に先立って、論理構成上「金融資本の一般的規定」が意図されているとみられ、しかも「金融資本」の動態的把握を意図するこの「蓄積様式」論は、この第一章の総括部分に位置づけられていること、また、それは前稿で取り上げた第一・二節における「金融資本」の静態的把握＝「支配機構」論と相互補完的な関係におかれていると考えられるからである。

第二に、宇野氏における「金融資本」の概念規定と「金融資本の蓄積様式」との関連について。宇野氏においては、この点も既に明らかにしたことであるが、「金融資本」は、資本主義発展の「段階区分」を画する「特殊の型の資本」＝「帝国主義段階」の「基礎」＝「支配的なる資本形態」として独自の概念規定が行われている。従って、「金融資本の蓄積様式」とは、一般的に解釈すれば、この「金融資本」が「帝国主義段階」の主導的契機として資本蓄積・生産諸力発展を担う主体となった場合の蓄積の様態およびこの段階総体の動態的過程の特質、すなわち独占＝帝国主義段階における資本の蓄積行動とその総結果としての社会的総資本の蓄積＝拡大再生産と諸矛盾の展開の特質、の解明が意図されているといえよう。課題の設定がこのようなものであるとすれば、宇野氏の場合、それが正しい内容をもって展開されているかどうか……、本稿の主題は、まさにこの点に係る。因に付言すれば、宇野氏の「金融資本」それ自体の一般的な概念規定は、前稿で検討した限り、極めて「不明確」かつ「一面的」たることを免れえないものである。敢えて再言すれば、そこから「不明確」ながら読み取れるのは、差し当たり(ドイツの)〈重工業株式会社〉に具現される〈銀行と産業との結合関係〉としての(株式

会社の〈支配機構の形式〉ということ以上のものではなく、われわれの分析視角から何よりも重要なことは、そこでの「独占」概念の欠如＝「独占」なき「金融資本」概念であるということである。そして、ここに本稿の主題の展開のいわば基本線が与えられることになろう。

そして第三に、分析の基本視角について。われわれが主張する視角は、独占資本主義を分析するさい必然かつ必要なものと考えられるその理論的・歴史的な分析視角にほかならない。その要点は、独占＝帝国主義段階把握の端緒的範疇をレーニン『帝国主義論』における「生産の集積と独占」に求め、その基本線上で、すなわち、〈競争〉の〈独占〉への転化＝〈独占と競争〉のもとで、産業における新たな生産力を担う主体である「独占資本」の構造と動態過程のうちに展開する新たな諸矛盾を、理論的であると同時に歴史的に分析すること、これである。この場合、「金融資本」に関しても、既に述べてきたように、この基本線にそって、「独占」——産業独占と銀行独占——の基礎上で、これら両者が「融合」・「癒着」（＝「金融資本」）することにより、新たな「現実的な力と意義」とを獲得していく過程として、分析・把握の対象とされなければならないのである。これに対して、宇野氏の場合には、周知のように、「労働力の商品化」の問題を基軸とする経済諸関係の「商品形態」的处理＝「純化」とその「限界」＝「逆転」（「……資本が、自らは生産することのできない労働力を商品として確保する方式のいかん」）という独自の段階把握の分析視角が強調されている。¹⁴⁾ その意義と限界についてのわれわれの考え方は、以下、主題の展開のうちに与えられよう。

(1) 「金融資本の蓄積様式」として宇野氏が提起される事態の基本的認識は、次のようなことである。

「……資本主義の発展は、特に重工業を中心とする大工業における固定資本の巨大化と共に、新なる資本の蓄積の様式を展開することになる。それは最初から資本の集中による巨大なる集積をもって蓄積を行う。勿論、産業資本においてもその集積の増進はしばしば集中によって促進せられたのであるが、それは景気の循環過程の恐慌後の不況の時期に主としてあらわれるものに過ぎなかった。金融資本は、これを逆転した形で、資本の集中を前提とするのである。……社会的再生産過程そのものを資本の集中によって支配しつつその蓄積を増進する。それは固定資本の巨大化によって——資本の蓄積の様式の反面をなし、またそれを決定する——労働力の商品化そのものを、重商主義や自由主義の時代と異った関係において実現しうることになったことを示すものにほかならない」¹⁵⁾

上記の叙述は、「金融資本の蓄積様式」の概括的特徴についての殆ど唯一の該当箇所であるが、この部分を含めて主題の重要性にもかかわらず それに関する叙述は全体として極めて明晰性を欠くものであり、「難解」¹⁶⁾である。

しかし、われわれの視角から、取えて内容について解釈を試み問題を整理すれば、ここでは、次の二つの論点が提起されているように思われる。

第一の論点は、先の引用文の前半に見られる指摘である。それは、「金融資本」が「最初から資本の集中による巨大なる集積」を前提として蓄積を行なう、という点である。これは、宇野氏の叙述の基調・文脈からすれば、資本制的企業が「株式会社形式」を採ることによってもたらされる個別資本の次元における資本蓄積の態様の変化に係る問題である。すなわち、「株式会社形式」の企業においては、資本の蓄積＝投下が（個々の直接的生産過程において生産・取得される剰余価値＝利潤にその蓄積源泉の基礎を置いている個人資本＝企業の場合とは異なり）株式の発行・増資によって行なわれるため、蓄積基金（源泉）を広く社会的に調達することが、その理念としても現実の行動としても、可能となるという変化にはかならない。これは、一般的に言えば、独占＝帝国主義段階における主要な資本蓄積の主体となる（独占的）巨大企業の蓄積基金（源泉）とその投資行動の問題に帰着するといえよう。

第二の論点は、引用文後半の指摘、すなわち、「労働力の商品化そのものを、重商主義や自由主義の時代とは異った関係において実現しうる」という点である。これは、上記の第一論点との関連、さらには、既に再三指摘した宇野氏の「矛盾」把握の基調との関連からすれば、「金融資本」（宇野氏の場合には「株式会社形式」を採る巨大企業）が蓄積主体となる結果として生じる「社会的再生産過程」の次元の問題、宇野氏の場合それは「労働力を商品として確保する特殊の機構」の変化、すなわち、産業資本主義段階に見られた周期的な恐慌現象を伴う景気循環の「攪乱」・「変容」という問題である。これも一般的に言えば、独占＝帝国主義段階における社会的総資本の蓄積・拡大再生産過程の特質とそれに規定される（景気循環の「攪乱」・「変容」を含めた）諸矛盾の新たな展開に関する問題であるといえよう。

以上のように、宇野氏の叙述から二つの論点を整理・区別したうえで、それぞれについて検討することにしたい。⁽⁷⁾

(2) まず第一の論点から。ここでの問題の要点は、既に指摘したように、「金融資本」を、差し当たり新たな資本蓄積の主体として、その限りで個別

資本の次元に限定して、その蓄積基金の源泉と投資行動の面でいかなる段階固有の特徴をもつことになるか、という点にある。そして、この点に直接関係すると思われる宇野氏の叙述を挙げれば、次のようなものがある。

「……株式会社にとっては、その事業に要する資本を、個人的蓄積によって制限せられることなく、いわば社会的に蓄積せられた資本をその必要に応じて集中して資本化しうるので、相当の利益の予想さえあれば、極めて巨額の資金を要する事業も比較的容易に開始することを可能ならしめるものである。資本額を増加する所謂増資の場合も同様である。」⁽⁹⁾ (引用文 ①)

「こういう相反する二面、即ち一方では不断に生産方法の改良、合理化を実現しようとし、他方では旧来の固定設備をできうだけ利用しようとするという、この二面は、勿論、それぞれの会社事業の情況、また産業部門を異にする諸会社の間の関係等によって、時には前者が、時には後者が主となるのであるが、しかし一般的には銀行の利害関係に具体的にあらわれる社会的資金の資本としての運用による利益によって決定されるといつてよい。」⁽⁹⁾ (引用文 ②)

「株式取引所を中心とする証券市場の発展は、かくして銀行を中心とする資金の市場としての所謂貨幣市場を基礎としながら資本の市場を形成することになる。資本の投資は、ここでは常に直接的に貨幣市場の利子率に規制せられながら行なわれる。」⁽¹⁰⁾ (引用文 ③)

上記の引用文は、しかし、そのいずれもがわれわれのここでの論点の設定にもかかわらず、これに明確に答えているものとはいえない。それは、既に前稿で明らかにしたことではあるが、何よりも宇野氏が「金融資本」の——蓄積主体としての「金融資本」の——概念規定を明確に与えていないということに起因する。この点を念頭に置いたうえで、それぞれについて若干のコメントを加えれば、次のようなことが明らかになる。

まず、引用文①は、文字通り株式会社の「資金の調達」機能について述べたものであり、外見上ここで問題としている蓄積主体としての「金融資本」の特徴とは結びつかないように思われるかもしれない。しかし、ここで次のような叙述をこれに重ね合せるとき、宇野氏においては、事実上、「金融資本」が「株式会社」と等しいものとされているということが改めて確認できる。

その叙述とは、先に引用した「金融資本の蓄積様式」の概括的特徴を述べた文章に続く次の文章である。すなわち、「資本家的企業の大規模化が、……巨大なる固定資本をもって、しかも株式会社形式によって行われることになると、資本の有機的構成の高度化に伴う相対的過剰人口の形成は極度に促進される。巨大なる固定資本を要する大事業の資本が社会的に形成せられる資金の集中によって比較的容易に行われるということの内には、拡張が個人的蓄積に制限せられないというだけでなく、生産方法の改善も、個人的企業のように既存の固定設備に拘束せられないで新なる会社企業として実現されうるということをも含んでいる。」⁽¹¹⁾ (引用文 ④)

この引用文④は、その内容として「株式会社」の独自の「資金調達」によって、蓄積源泉が、「個人的蓄積」に「制限」されず、拡大すること（蓄積基盤の拡大＝巨額の投資の可能性）によって、（「生産方法の改善」の在り方をも含めて）その投資行動が、個人資本＝企業のそれとは異なった新しい特質をもつに至ること（独占的的巨大企業に固有の投資行動）を述べたものであり、次の引用文②との関連でも、また、その叙述の位置づけからしても、「金融資本の蓄積様式」という問題設定にとって、さらに限定してわれわれの第一の論点にとっても、いわば核心的部分をなすものである。しかし、ここで明らかのように、「金融資本」が実は「株式会社」にほかならないということになれば、「金融資本」が「重商主義や自由主義の時代」とは異なった独自の「蓄積様式」を展開するという問題の設定がその概念として根本から覆されることになるであろう。もっとも、こうした帰結は、前稿で指摘した「金融資本」＝〈重工業株式会社〉という宇野氏の理解からすれば当然のことではあるが。⁽¹²⁾

次に、引用文②について。ここでは、上記①で示されたこと、すなわち蓄積基盤の拡大＝巨額の投資の可能性という新たな特徴を承けて、「金融資本」（実は「株式会社」）がその投資行動の面で、見られるような、「二面性」——「生産方法の改善」＝新生産方法の導入における「不断」の促進とその遅延の可能性——をもつことが述べられている。これは、明らかに、「宇野恐慌論」における産業資本主義段階の典型的な景気循環の特徴——〈好況期＝資本構成不変の蓄積〉、〈不況期＝資本構成の高度化を伴う蓄積〉——を基準にして、それに対応する投資行動の変化として把握されているものである。⁽¹³⁾ そして、この点に関してもいくつかの問題点を指摘することができる。

一般的に投資行動のこの段階での特徴を考える場合、われわれが決定的に重要であると理解していることは、それが〈独占と競争〉——〈競争〉による資本蓄積の「強制」作用が全面的には働かない状況——のもとでの、従って主要な蓄積主体としての独占的巨大企業の投資行動の特徴である、という点である。この点からするならば、それは単に「生産方法の改善」の時期の問題に限定することはできないということ——さらにいえば、この段階でもはや典型的な景気循環の局面移行それ自体を前提とすることはできないのであり、逆にそれを前提とする限り、こうした投資行動の結果もたらされる「社会的再生産過程」の動態の変化は必然的に景気循環の「攪乱」・「変容」という枠組を出ないものとなるのであるが——である。そのうえで、この引用文の内容として、一層重要なことは、この「二面性」——一般的には、独占的巨大企業の投資行動における「消極性」と「積極性」——のうちのいずれが、どのような条件のもとで現出するか、という点についての後半部分の記述がまったく意味不明の叙述となっている、ということである。

最後に、引用文③についてであるが、ここでの焦点は、「資本の投資」が「常に直接的に貨幣市場の利子率」に「規制」されるというその内容である。この場合の「資本の投資」とは、文脈上「金融資本」(実は「株式会社」)の投資のことであろうが、それが「常に直接的に……利子率」によって「規制」されるとは、一体具体的にどのようなことを指しているのだろうか、まったく理解することができない。

因に、宇野氏は資本制的生産のもとにおける「信用制度」の一般的な機能と役割について、次のような認識をもっており、ここでの叙述も恐らくそれを基準としたものであろうと推測される。すなわち、「……信用制度は、……貸付資本を資本の社会的再生産過程において社会的な規制力を有するものとして確立する。……利子率の変動は、個々の資本の盲目的活動によって生ずる利潤率の動向に対して、資本家社会的な……規制をなすのである」⁽¹⁴⁾

しかしながら、この叙述を基準としても、引用文③の文意が理解可能となるわけではないのである。

以上、われわれの第一の論点——独占＝帝国主義段階における新たな蓄積主体の確定とそのもとでの蓄積源泉・投資行動の特質——についての検討の結果、次の諸点が明らかになった。

すなわち、宇野氏が独占＝帝国主義段階の基軸におかれている「金融資本の蓄積様式」の、その蓄積主体としての「金融資本」とは実は「株式会社」（形式を採る資本家の企業一般）にはほかならないこと——しかし、その限りで、個人資本＝企業のそれとは異なり、蓄積基盤の拡大＝巨額の投資の可能性をもつに至ること——、また、投資行動の面では、単に産業資本主義段階における景気循環を基準とした「生産方法の改善」をめぐる「二面性」の問題に言及されているに過ぎないこと——また、その限りでではあるが、〈競争〉の「強制」作用が全面的には支配しないもとは独占的巨大企業の投資行動が種々の諸条件に規定された「積極性」と「消極性」の時期的交替として現出する可能性があること——、これである。

この第一の論点に関して、宇野氏の問題提起の意図にもかかわらず、これまでの検討で明らかのように、その展開が極めて不十分・不明確である最大の原因は、これも既に述べたように、独占＝帝国主義段階論の方法における「独占」概念の欠如＝「独占」なき「金融資本」概念の設定という点にあるといわなければならない。これに対するわれわれの方法＝分析視角は、いうまでもなく「生産の集積」に基づく「独占」を基軸とするものであるが、われわれのこの立場からする上記の諸問題の克服の方向は、次の第二の論点を検討した後、併せて提起することにした。

(3) 第二の論点は、第一の論点で取り上げた蓄積主体の段階的な変化に伴なう「社会的再生産過程」の動態の特質の問題である。宇野氏の場合、既に述べたように、それは「労働力を商品として確保する特殊の機構」の変化＝景気循環の「攪乱」・「変容」という問題になるが、一般的にいえば、この段階における社会的総資本の蓄積と生産諸力発展という動態的過程を規定する諸矛盾の新たな展開の特質に関する問題である。以下、ここでも宇野氏のこの点に該当する叙述に内在して要点を明らかにしていくことにする。

「産業資本の場合との相違は、貨幣市場が資本市場と互に、それこそ直接的に……融通し合う関係にあるという点である。このことは帝国主義時代の恐慌現象に非常に大きな影響を与え、その典型的過程を攪乱するものといってよいであろう。」⁽¹⁵⁾(引用文 ⑤)

「……金融資本の支配する帝国主義の時代においては、恐慌がなくなるというのではない。自ら形成する産業予備軍としての過剰人口の動員に一定の限度をもつてのぞむと

同時に、他方では……生産物を資本に転化しえないで過剰にもつということになる。……金融的に規制せられながら——というよりも金融的に規制せられるからといった方がよいかも知れないが——個々の産業、個々の企業にとっては常にその生産物の販路が重要な問題とならざるをえない。そしてそういう一方の過剰人口と他方の過剰生産物とは、特に新なる市場の開発というような外的要因でも加われば、貨幣市場を基礎とする資本市場に所謂設立投機をもたらさずにはいないのであって、しばしば産業資本の時代よりもより以上に投機的な好況期をも実現する。(16) (引用文 ⑥)

この第二の論点に直接的に関係すると思われる宇野氏の叙述は、二つのパラグラフから構成されるごく短いものであるが、その論旨を理解することは容易ではない。しかし、敢えてわれわれの解釈を試みるならば、ここには次の二点が指摘されているようである。

すなわち、宇野氏が「社会的再生産過程」の段階的変化の特質として挙げられるのは、見られるように、一方で「産業資本主義時代」の恐慌現象の——特に、好況末期から恐慌への局面の移行を中心とした——「攪乱」(引用文 ⑤)であり、同時に、他方で「過剰人口」と「過剰生産物」の併存=資本蓄積の〈停滞〉と「外的要因」に依存した「投機的」な〈発展〉という両極的な「傾向」のことである(引用文 ⑥)。宇野氏の論旨を差し当たりこのように問題として立て直すことができるとすれば、ここには、われわれの基本視角からすれば、それぞれの内容についての疑問点は勿論のこと、さらに一層重要な宇野氏の〈経済学の方法〉全般に関連する極めて重大で興味深い方法的問題が示されているといえよう。

それは、こうである。この引用文⑤は、実は先の引用文②で始まる同じパラグラフにあり、その最終部分をなすものである。そして、これら両者の間には、既に指摘した投資行動における「相反する二面」のいずれかの現出を必然化させる契機とされている(意味不明の)文章——「……一般的には銀行の利害関係に具体的にあらわれる社会的資金の資本としての運用による利益によって決定される……」——に関係するらしい叙述——「利率」を媒介とする「貨幣市場」と「資本市場」との関連、およびそれによる「社会的再生産過程」の「規制」など——がある。(17) つまり換言すれば、引用文②と⑤とは、極めて理解が困難な——しかし②(=投資行動における「相反する

二面」)から⑤(=景気循環の「攪乱」)を導き出すためには決定的な決め手になると思われる——独自の「金融資本に特有な金融的規制」⁽¹⁸⁾に関する叙述を媒介として結ばれる関係にあり、全体として一つのパラグラフを構成しているのである。従って、実際のところ、引用文⑤の論拠は殆ど不明であるということにならざるをえない。すなわち、景気循環の「典型的過程」が、なぜ、いかにして「攪乱」されるのか、という点については一切不明であるということである。こうして、既に第一の論点を検討した際に指摘した宇野氏のこの「金融的規制」なるものの実体が混沌としていて不明であるということが、「社会的再生産過程」の次元の特質を明らかにしようとするここでも、再び致命的な欠陥として登場することになるといえよう。

次に、この引用文⑤について、より一層重大な方法的問題は、先の投資行動における「相反する二面」と上記の「金融的規制」との関連で、それらが「労働力の不断の過剰」を「実現」するという主張が行なわれているという点に係る。すなわち、「……資本にとって最も有利に利用しえられる労働力の不断の過剰を実現しつつ、それによって条件づけられるわけである」⁽¹⁹⁾と。ここでも、「労働力の不断の過剰」が「実現」される論拠が不明な点は、先の場合と同様である。だが、いまその点は問わないとして、仮りにこの「労働力の不断の過剰」が「実現」するとすれば、そのこと自体、宇野氏の〈経済学の方法〉とそれに基づくここでの「帝国主義段階論」の方法の整合性にとって、極めて重大な点が浮かび上ってくるのである。それは、もし仮りに「労働力の不断の過剰」が「実現」するとしよう。この場合には、宇野氏の「恐慌論」における「基本的規定」⁽²⁰⁾——好況過程における資本の有機的構成不変の蓄積増進→労働力の吸収・賃金上昇→利潤率低落・「資本の絶対的過剰生産」——からして、その限りで「帝国主義時代の恐慌現象に非常に大きな影響を与え、その典型的過程を攪乱する」ことは論理的帰結として容易に理解できることである。だがしかし、問題の核心は、こうした事態が単に景気循環の「典型的過程を攪乱する」というだけのことであるのかどうか、ということである。結論を先取りしていえば、それは、単に景気循環を「攪乱」するというだけではなく、既に述べたように、宇野氏の〈経済学の方法〉からすれば、「労働力を商品として確保する特殊の機構」としての景気循環

それ自体がここでは（逆に）無用のものとなり、解体するというだけでなければならないのである。従って、この意味で、宇野氏の方法を整合的に理解しようとするれば、「金融資本の蓄積様式」＝「商人資本、産業資本に比せられる歴史的に特殊な蓄積の様式」とは、景気循環の解体という以上のものでも以下のものでもなく、決して肯定的に定式化しうるようなものではない、という結論に帰着せざるをえないのである。

因に、宇野氏はこのことを、次のような表現で、事実上、認めているのである。すなわち、独占＝帝国主義段階においては、「恐慌現象の必然的根拠をなす賃金の騰貴による利潤率の急激なる低落は、生産物の過剰による利潤率の低落の内に埋没せられる傾向を著しく強化する」⁽²¹⁾と。ただしこの場合でも、「埋没」ではなく正しくは「解体」というべきであろう。

また、馬場氏は、「したがって、金融資本の蓄積を、その必然性を含むものとして一律に定式化することはできない。……大型の長期的拡大も大型不況も、可能性としては排除し得ないのである。宇野が明確な定式化を回避したのは、あるいはそうした問題を配慮していたためかも知れない。」と述べている。⁽²²⁾ ここでも、「定式化」を「回避」したのではなくて、それは「不可能」としたのであるというべきであろう。なお、この点は、次の引用文⑥の理解とも係る。

以上、引用文⑤をめぐる検討の結果、次の点が明らかになったといえよう。すなわち、独占＝帝国主義段階の「社会的再生産過程」の動態の特質を、宇野氏の叙述に即して、一方で景気循環の「典型的過程」の「攪乱」として理解しようとするれば論拠不明であるといわざるをえず、また他方で、われわれの仮定に基づいて、「労働力の不断の過剰」という点を前提とすれば、景気循環の機構それ自体の解体ということに尽くされる、ということである。要するに、既に述べたように、いずれにしても「金融資本の蓄積様式」なるものは、「社会的再生産過程」の動態の特質を肯定的に定式化しうる概念ではないということにはかならない。そして、宇野氏の方法を整合的に理解しようとするれば、そのようにならざるをえないのである。つまり、これも既に明らかにしたように、「労働力の商品化という資本主義の根本的矛盾」を基軸にする宇野氏の方法によって論理的に最大限演繹することができるのは、景気循環＝「労働力を商品として確保する特殊の機構」の解体ということまでである。そして、それ以上に「金融資本の蓄積様式」を肯定的に定式化しよ

うと試みることは、方法的に基準がなく、従って不可能であると同時に、宇野氏の方法を越えるものとして、むしろ方法的な矛盾をもたらすものであるといわなければならない。ここに、われわれの課題からして、宇野「帝国主義段階論」の方法の限界を改めて確認することができよう。

ここで改めて、宇野氏の方法を支える次のような基本的認識を想起すべきである。すなわち、「資本の金融資本化は、……最早や純粹の資本主義社会の実現に徹底的に進むものとはいえない傾向をもつことになる」という、あの「純化」と「金融資本における逆転傾向」という認識である。⁽²³⁾そして、それはこの「逆転」した世界＝「帝国主義段階」のもとでは、「たとえば価値法則とか、利潤率均等化の法則と異なって、段階論的規定は、もはや繰返し貫徹する法則ではなく、それこそ原理論的法則を前提とし、その内に包摂しながら典型的なるものとして展開せられざるをえないのであって、それらは原理論で前提されるように「純粹に展開される」わけではない。」⁽²⁴⁾という方法に具体化されるのである。要するに、それは「段階論的規定」における、歴史的過程からの掃納に基づく一定の「法則」的把握の拒否と方法的不可能性のことであるに過ぎず、「こういう逆転した傾向が主導化するということは、……資本主義が決して永久的な社会形態ではなく、一定の時期に始まって一定の時期に終るということと対応したものといつてよい」⁽²⁵⁾というのは、宇野氏の信念の表白以外の何ものでもない。

以上、宇野氏の方法の特徴＝限界がこれまで明らかにしてきたような点にあるとするならば、先の引用文⑥で示されているような「社会的再生産過程」の新しい事態についての指摘——「過剰人口」と「過剰生産物」の併存＝「実現問題」の慢性的な深刻化のもとでの資本蓄積の〈停滞〉と「外的要因」に規定された「偶然的」・「投機的」な〈発展〉というそれ自体としては極めて貴重な指摘——の内容について、宇野氏が分析することは不可能であるといわなければならない。既に指摘したような理由で、宇野氏の方法を厳密に適用しようとするれば、分析のための方法的基準が存在しないからにほかならない。⁽²⁶⁾

(4) 先の引用文⑥をはじめとして、宇野氏のいくつかの貴重な先駆的な指摘の内容は、むしろ、われわれの分析視角に基づいてはじめて十分な展開が可能となろう。いうまでもなく、われわれの分析視角は、既に何度も明らかにしてきたように、「生産の集積」に基づく「独占」を端緒的範疇とするものであり、その展開の基本線上で、この段階の新たな資本蓄積・生産諸力発展を主導する主体である「(産業)独占資本」が、「銀行独占」と「融合」・

「癒着」(=「独占者の連合」⁽²⁷⁾=「集团的資本家」⁽²⁸⁾=「金融資本」)することにより獲得する新たな「現実的な力」を前提として、独自の蓄積基盤を拡大しつつ行なう投資行動の総結果として、社会的総資本の再生産過程に固有の諸矛盾を展開していく、この過程をその構造と動態の両面から、一般理論からの演繹と歴史過程からの帰納の交錯のうちに確定していこうとするものである。

この場合、「金融資本」が獲得する新たな「現実的な力」とは、「集团的資本家」として、一方では「資本」の論理と行動のより純粹かつ客観的な貫徹の担い手となることであり、他方では、ありとあらゆる「金融利得」(直接的生産過程での「搾取」および市場支配に基づく「収奪」以外の、株式発行・増資の際のそれを含めた「利得」・「貢物」)を含む蓄積基盤の拡大という点に、基本的には求められよう。また、それゆえにその行動において「金融的規制」を受けることになるのである。先に引用した宇野氏の混乱した叙述も、こうした脈絡で整理・位置づけることによって、その内容と意義を再発見することができるように思われる。それは、われわれの次の課題にほかならない。

III 小 括

われわれは、宇野弘蔵氏が残した先駆的研究から、〈経済学の方法〉においても、また、その内容においても、多くのことを学んだ積りである。

しかしながら、資本主義の独占=帝国主義段階の認識に関しては、その方法的限界はまた余りにも大きいといわざるをえないのである。それは、一言でいうならば、宇野氏にとって「労働力の商品化(の矛盾)」の意義が資本主義分析にとって決定的な重要性をもつという判断と、その宇野氏が「帝国主義段階」に関して構成した認識の諸概念が現実の的確かつ有効な分析視角となりうるかどうかとは全く別のことだ、ということにほかならない。宇野氏の場合、歴史的過程は、本質的に、「原理」からの演繹と解釈の対象でしかなかったのではなからうか。

いま、われわれに必要なかつ可能なことは、現実の歴史的過程の、その混沌のもとで浮遊しつつも、この歴史の一過程のなかに「原理」=一般的理論か

ら演繹されうる諸要素の「痕跡」を確認しそれに促迫されつつ、同時に、その直接の射程外の諸要素については帰納的推理の対象としなければならないということ、総じてこれら両者の不断の「交錯」を分担していかなければならないという自明の作業を再発見することであろう。われわれが一見無意味とも思われる解釈学的考察を通じて確認しようとしたことはこのことであり、それは「理論的」であると同時に「歴史的」であるというわれわれの分析視角のことにほかならない。

〔注〕

- (1) 宇野弘蔵『経済政策論』（弘文堂、1954年）、157～158頁。なお、同書「改訂版」（1971年）では、該当する箇所を、「資本の型」が「資本のタイプ」と書き改められている。（『宇野弘蔵著作集』第7巻、岩波書店、1974年、173～174頁。以下、「改訂版」からの引用は、同「著作集」による。）
- (2) 同上、「改訂版」、77頁。ここに引用した叙述は、原著の該当部分（第二編のはしがき部分）にはなく、新たに書き加えられたものと思われる。
- (3) これらの諸点については、前稿——「独占資本主義分析と宇野『帝国主義段階論』（上）、（中）——および、拙稿「独占と資本蓄積（1）——独占資本主義分析の基本視角——」（『金沢大学経済学部論集』第2巻第1号、1981年）を併せ参照されたい。
- (4) 宇野氏の別の表現を借りれば、「労働力の商品化という資本主義の根本的矛盾」（宇野前掲『経済政策論』、68頁。「改訂版」、85頁。）ということであり、この矛盾把握が同氏の『経済学方法論』の基軸となっていること、既に明らかにしてきた通りである。
- (5) 宇野前掲『経済政策論』、158頁。「改訂版」、174頁。
- (6) 馬場宏二「金融資本の蓄積様式——金融資本と帝国主義（三）——」（『社会科学研究』第32巻第3号、1980年、89頁。なお同論文は、同氏の近著『富裕化と金融資本』、ミネルヴァ書房、1986年、に収録されている。155頁。）馬場氏は、ここで宇野氏の「金融資本の蓄積様式」について内在的な解釈・検討を行っているが、「……有益な論点を多数含みながら、叙述はかなり難解であり、解釈しきれない部分さえある。とりわけ全体像がはなはだあいまいである」（91頁。同著、158頁。）という判断を下しており、宇野氏の叙述について整合的な解釈を下すことを断念している。
- (7) 宇野氏の「金融資本の蓄積様式」について、それを継承する立場からその内在的検討を試みた従来の研究においては、これら二つの論点がいわば混然一体となって取り扱われており、両者の問題領域・次元の区別と関連は必ずしも明確に取り上げられてこなかったように思われる。例えば、馬場前掲論文のほか、岩田 弘『世界資本主義』（未来社、1964年）、また、最近のものとしては、石見 徹『ドイツ恐慌史論』（有斐閣、1985年）など。他方、これとは別の立場からのものとして、本間要一郎『現代

- 資本主義の基礎理論』（岩波書店、1984年）も参照。
- (8) 宇野前掲『経済政策論』、143頁。「改訂版」、159頁。
- (9) 同上、160頁。「改訂版」、176頁。
- (10) 同上、146頁。「改訂版」、163頁。
- (11) 同上、158～159頁。「改訂版」、174～175頁。
- (12) 従来、宇野氏のこうした叙述を根拠にして、同氏の「金融資本」とは実は「株式会社」のことであるという点を指摘・批判したものは少なくない。例えば、北原 勇氏は、「……宇野氏の『金融資本的蓄積様式』なるものが実は株式会社の蓄積様式に他ならないこと、また氏が帝国主義段階の基本的特徴を独占支配ではなく株式会社制度の普及に求めていること」（『三田学会雑誌』第71巻第5号、1978年、136頁。）を指摘されているほか、本間要一郎氏も「……宇野にとって……『金融資本の蓄積様式』といいながら、その具体的内容は、事実上『株式会社の蓄積様式』と呼ぶにふさわしいものになっているのである。」（本間前掲『現代資本主義の基礎理論』、229頁。）と述べている。本稿の課題は、こうした従来の批判を繰り返すことにあるのではなく、宇野氏の叙述を内在的に検討することにより、既に指摘したように、「金融資本の蓄積様式」に関する論点を整理・区別したうえで、改めてその独占＝帝国主義段階分析の方法的枠組としての意義と限界を明らかにしておくことにある。因に、宇野氏の「金融資本」概念が実は「株式会社」であるということをもって直ちにそれは「株式会社の蓄積様式」にほかならないとして退けてしまうことは、われわれが提起している二つの論点のそれぞれの問題の所在と次元の区別と関連を看過することにならざるをえず、逆に宇野氏の問題点の全面的な批判的検討にはならないと思われる。
- (13) この点については、拙稿「宇野『恐慌論』の問題点」（『三田学会雑誌』第68巻第5号、1975年、44頁。）を参照されたい。
- (14) 宇野前掲『経済政策論』、68頁。「改訂版」、86頁。事実、宇野氏は典型的な景気循環過程における「恐慌の勃発の契機」を好況末期の「利潤率の低下と利子の昂騰との衝突」として説かれているが、その論証は必ずしも成功しているとはいえない。宇野弘蔵『恐慌論』（岩波書店、1953年）および上記拙稿を参照。
- (15) 同上、160～161頁。「改訂版」では、後半の文章が次のように書き改められている。「このことは金融資本の帝国主義時代の恐慌現象に大きな影響を与え、産業資本の時代のように資本の過剰をも貨幣市場の利子率の高騰によって規制せられるという典型的過程を攪乱するものといってよいであろう。」（同、176～177頁。）この「改訂」の内容は、先に注(14)で指摘しておいた好況末期における「恐慌の勃発の契機」を明示した点にある。
- (16) 同上、161頁。「改訂版」、177頁。
- (17) これらの点に関して、ここで引用した文章を含めた宇野氏の叙述の混乱については、それを継承する立場にある馬場氏も、次のような評価を下さざるをえなかったのである。「……この引用文が具体的に何を指しているのか、前後の関係をみてもほとんどわからない。……いずれにせよ、この一文は解釈を確定し切れないのである。」（馬場

- 前掲「金融資本の蓄積様式」, 89~90頁。同著, 156頁。)
- (18) 宇野前掲「経済政策論」, 161~162頁。「改訂版」, 178頁。この部分を含めた文章は、次のようなものである。「資本主義の発展動力もまた金融資本に特有な金融的規制のもとにおかれるものとなるのである。」
- (19) 同上, 160頁。「改訂版」, 176頁。
- (20) 前掲拙稿「宇野『恐慌論』の問題点」を参照されたい。
- (21) 宇野前掲「経済政策論」, 136頁。「改訂版」, 135頁。
- (22) 馬場前掲「金融資本の蓄積様式」, 107頁。同著, 182頁。また、岩田 弘氏もこのことを認ており、「……じつは、教授の想定されるところとは反対に、ひとつの安定的な「蓄積様式」ないしは蓄積機構の「型」をもたぬ」（前掲「世界資本主義」, 289頁。）として、独自の展開を試みている。
- (23) 宇野前掲「経済政策論」, 163頁。「改訂版」, 179頁。
- (24) 同上, 「改訂版」, 35頁。この叙述も原著にはないものである。
- (25) 同上, 163頁。「改訂版」, 179頁。
- (26) 馬場氏の次のような文章は、このことを理解しているとはいえない。「金融資本の蓄積が自律性をもたず、それゆえその景気態容が、原理的恐慌論にいう資本過剰説的過程から転形して商品過剰説的過程になること、したがって景気が周期性を失いかつヨリ外部依存的になる……」（馬場前掲「金融資本の蓄積様式」, 104~105頁。同著, 178頁。）つまり、ここでは「金融資本の蓄積」が「自律性」をもたないことが、なぜ、「それゆえ」に続く事態をもたらすのかについて、全く説明されていないからである。
- (27) レーニン『帝国主義』（宇高基輔訳, 岩波文庫）, 55頁。
- (28) 同上, 58頁。